

インタビュアー



住宅金融支援機構 広報グループ

**小林 楓** (こばやし かえで)

2014年4月住宅金融支援機構入構。東北支店を経て、2016年4月より現職。

## わたしらしく、暮らせるまち。 都会のローカルのまちづくり



豊島区政策経営部

「わたしらしく、暮らせるまち。」推進室長

**宮田 麻子様** (みやた あさこ)

長野県生まれ。米国の大学を卒業後、外資系メーカーのマーケティング職やマイクロソフト日本法人の広報を務めた後、フリーランスでPR業務に従事。豊島区の公募に応募し、2016年4月より現職。民間企業での経験を活かし、区内の企業や大学、地域内のコミュニティとの連携により、まちづくり施策展開や情報発信を行いながら地域ブランディングを推進している。

現在のお仕事に至るまでの経緯をお聞かせいただけますか。

前職までは民間の外資企業でマーケティング、主に広報の仕事をしていました。日本マイクロソフトでは、一般消費者向けから法人向けまでの幅広い製品・サービスPRのほか、CSR（社会貢献活動）をはじめテクノロジーを活用した地域課題解決のような事業に関わっていました。

グローバルな企業環境で最先端の商品・サービスをどんどん市場に出していく仕事の一方で、地域に眠っているものに光を当てるような仕事に興味を持ってきました。フラットな企業文化、柔軟なワークスタイルは性分に合っていた反面、働く（走り続ける）ペースについて考えることもしばしばあり、日本マイクロソフトを退社しフリーとなり、中小企業や地域のPR活動にしばらく携わっていました。その折に偶然見つけた地元でもある豊島区の公募で登用され、今年で3年目になりました。

公募の時から部署名が変わりましたが、背景を教えてください。

公募のときのポスト名は、豊島区が23区で唯一、消滅可能性都市との指摘を受けたことがきっかけとなり、女性やファミリー層向けのまちづくりをしていこうという方針で、「女性にやさしいまちづくり担当課長」でしたが、今年『「わたしらしく、暮らせるまち。」推進室長』と名を変えました。「わたし



らしく、暮らせるまち。」とは、就任1年目に定めたまちづくりのコンセプトで、女性に視点を合わせたまちづくりをすることで、子どもやお年寄り、外国人など、だれもが自分らしく暮らせるまちにしていこうという想いを込めています。また、「女性」という言葉は限定的なイメージがありますが、「わたし」と一人称は対象を限定しないですよ。

活動自体も、女性や特に子育て世代をメインターゲットにしなが、多世代の交流や多文化共生など幅が広がってきました。

実際どのようなことに取り組まれたのですか。

このポストの役割は地域のニーズを掘り起こしながら、組織横断的にまたがる各種関連事業をコーディネート、再編集し推進することにあります。手始めにマーケティング的な視点から、相対的な豊島区のポジショニングやターゲットを明確化するため、まずは豊島区に居住又は転入してきて3年未満の人たち約800人と周辺5区に住む人を対象にインターネット調査を実施しました。

アンケートの結果、住民のまちに対するイメージやニーズが少しずつみえてきました。外からみたイメージと実際にまちに住んでいる人たちのイメージのギャップ、実際に住むことで実感できる意外なまちの魅力、池袋に代表されるように悪く言えばごちゃごちゃ、翻せば一色に染まらない、多様な個性を受け入れる懐の深いまちということが挙げられました。また、都会にあってローカルな雰囲気を持ち合わせている。目白、巣鴨、駒込も豊島区で、1つ1つ個性ある地域の集合体が豊島区なのでしょう。この豊島区らしさを活かしたまちづくりのため、掲げたコンセプトがさきほどの「わたしらしく、暮らせるまち。」です。

情報発信におけるデザインの部分にも注力しています。ロゴデザインは、複数の形の集合体を、輝く



わたしらしく、  
暮らせるまち。

石（ダイヤモンド）＝まちに見立てており、「さまざまな人が暮らす家が集まることで、まち全体が輝く。そしてそこに暮らす人々も輝けるように」という想いが込められています。

「としまscope」についてご紹介ください。

地域メディア「としまscope」運営は事業の大きな柱の一つです。住民の方々にまちに対してもっと関心を持ってもらうこと、「こんな人が住んでいるんだ」「こんな活躍している人がいるんだ」と知っていただき、住んでいる地域への理解や愛着をもってもらうことを目的としています。そのため、区の広報紙のように区からの情報提供やお知らせではなく、地域に住む人、働く人、活躍する人を主役としています。

再開発マンションもどんどん建設されてきており、最近ファミリー世帯も増えてきました。新しく引っ越してきた人には古くから住む人が多いエリアにはなかなか溶け込みにくいようなので、「としまscope」でまちの雰囲気を伝えることで、双方の接点になればいいなと思っています。手に取りやすさを意識したデザイン、ウェブに加えてタブロイド紙の発行もはじめ、公共施設のほか、カフェやお店にもご協力いただいています。

「としまぐらし会議」とはどんな会議ですか。



「としまぐらし会議」は、自分たちで「わたしらしく、暮らせるまち。」をつくる作戦会議です。いわゆる住民ワークショップとの違いは、そこに住民だけでなく、区内企業や区職員も一緒に参加する場になっていることです。

行政主導のまちづくりはハード面の内容が多いですが、この会議は暮らしにもっと寄りそって、フラットに話し合える場にしています。なるべくいろんな人に参加して欲しくて、「としまscope」で公募したところ、30人枠に60人以上の方が応募してくれたんです。自分たちのまちに貢献したいとか、関わりたいと思ってくれている人が多くいるというのが分かって嬉しかったですね。

会議はあえて最初からお題を決めずに進めました。1回目では「私が10年後に見たい豊島区の風景」をイメージしてもらって、2回目の会議では自分がしたいことと地域課題を繋げる作業をしたら、きれいに10個のプロジェクトに分かれて、びっくりしました。

この会議の特徴の1つは、全部行政が予算化して事業を推進するのではなく、基本は自走を目指しています。なかにはクラウドファンディングで資金を集めて実施するプロジェクトもあります。

もちろん、行政が伴走する場面もあります。例えば、

公園や遊休地を活用したプロジェクトでは、場を提供したり、町会をはじめとした地域との交渉などのお手伝いをしたりしています。

「としまぐらし会議」で発案されたプロジェクトの近況を教えてください。

会議自体は終了したのですが、プロジェクトを応援してくれるサポーターを募集して、現在トークサロンを開催しています。8月、10月と2回開催し、計83人も集まってくれました。トークサロンでは、各プロジェクトの進捗を報告し合い、課題を共有して、新たなメンバーも加わりながら、プロジェクトを前に進めていくことを目指しています。もちろんプロジェクトの実現もゴールではあるのですが、回を重ねるごとに、関わる人の輪がひろがり、参加者同士のつながりが生まれているところが一番の成果だと感じています。

現在活動しているプロジェクトの一例を挙げると「農縁公園」があります。区画整備で将来的に道路になる遊休地を利用し、プランター菜園をする都市農園プロジェクトです。文字通り農園をすることで、少しずつ近隣の方々との縁・つながりが生まれています。繰り返しになりますが、住民の方が地域に参加できる、そんな場づくりをするのがこの会議の主な目的です。

他のプロジェクトはありますか。

「としまパブリックトイレプロジェクト」と称し、「暗い、汚い、怖いといった従来の公衆トイレのあり方を見直し、より使いやすい「パブリックトイレ」として生まれ変わらせるプロジェクトがあります。老朽化した85ヶ所の公園トイレを改修する中で、建て替え対象のものを中心に、アーティストや住民の方とトイレに絵を描く「アートトイレ」というプロジェクトを実施しています。地域住民や近隣

の保育園児や小学校の児童達との共同制作などを行い、地域色のあるアートトイレが誕生しています。

さらに、このプロジェクトがきっかけとなり、地域に点在する小規模公園を活用するプロジェクトも始まっています。豊島区は人口が29万人で実は日本一人口密度の高い都市ですが、都立公園のような大規模公園がなく、1人当たりの公園面積は23区で最低である一方、小さな公園は沢山あるため、これらをもっと活用しようというものです。

例えば、再開発の結果できた三角州のような形状の公園を活用して、定期的にモーニングマーケットを行っています。タワーマンションの住民の方と、古くからの住民の方たちが同じ空間で朝ご飯を食べるような仕掛けを毎回展開しています。出店者には商店街のパン屋さん、肉屋さん、豆腐屋さん商品を提供してもらって、ここで販売したりしています。



区役所内でプロジェクトを進める上で大変なことはありますか。

複数にまたがる組織横断型プロジェクトが多いので、そこはやはり組織の壁ですね。公園プロジェクトについては、公園緑地課と協力してプロジェクトを進めています。プロジェクトが区の事業のため、また今ある課題への対応策にもなることの意識共有が大切です。

例えば、低利用の公園ならば住民が主体的に何らかの活用をするとともに、維持管理の部分もサポートしてくれるように、さらには町会の次に代わる担い手が発掘できれば良いですね。民間だけでも行政だけでも実現できないことが多く、お互いにより連携することが必要だと思います。

日本が「自分らしく暮らせるまち」になったら良いと思うのですが、そのためにはどんなことが必要と思われますか。

多様性とよく耳にしますが、日本は比較的まだ懐の深さがあまりないというか価値観が狭いように感じます。価値観やそれに伴って選択肢がもっと広がって行って、混沌とした池袋のごちゃごちゃ感がいいと思われるような社会になれば、自分らしく暮らせる日本になるのではと思いますね。

また、日本では内と外の意識が強くて、公共空間と私的空間がはっきり分かれている印象ですが、より民度の高いパブリック空間や、地域に開いた私的空間が増えることで、人とまち、人同士がつながる機会が増えるのではと感じています。

最後に、弊機構に期待することをお聞かせください。

私はあるものを活かす、リノベーションを好みます。だけど日本はすごく新築信仰ですよ。住んで1日でも経つと資産価値が下がるじゃないですか。地震も多いし、木造なので火事も多いし、分らないくないんです。一方、ニューヨーク州に住む大学時代の友人の家に久しぶりに訪れたのですが、築100年の家に普通に住んでいて、購入価格の3倍掛けてリノベーションしたそうです。日本では空き家が年々増えているので、なんでも建て替えるのではなく、既にあるものを活用していき、それを促進していく仕組みがもっとあればと思います。機構には、融資面でぜひ後押ししてもらいたいです。